瑷（あい）

光耀抄 …… 2
琥珀集 …… 6
瑠璃集 …… 13
瑪瑙集 …… 26
紅玉集 …… 28
俳誌交歓 …… 29
８月号月評 …… 30
恵贈句集拝見（35） …… 32
（36） …… 34
他誌転載 …… 36
特別作品「美ら海」 …… 38
琥珀集作品鑑賞 …… 40
瑠璃集作品鑑賞Ⅰ …… 41
Ⅱ …… 42
瑪瑙集紅玉集作品鑑賞 …… 43
エッセイ「信仰の道」 …… 45
姫の国父の蒼天（29） …… 46
長岡天満宮・光明寺吟行 …… 48
ひこばえ通信（11） …… 50
エッセイ「走り庭」 …… 51

2011/8　第65号

今月の一句

邪鬼あをし秋暑の塵を鼻におき　桂樟蹊子

（昭和二十九年作）

奈良西大寺観音堂にある四天王を詠まれた何である。堂々と見事でありむがらも、苦役を強いられる邪鬼の鼻におかれた埃を見て、余計にその哀れに心を打たれたようである。塵を鼻におく邪鬼に親しみと、いとしさを感じられたことであろう。「邪鬼あおし」の表現が新鮮、樟蹊子ならではの措辞であろう。

隆子

PDF= 俳誌の salon

渋の甕

塩路隆子

冷麦に一すぢ赤のアクセント

公然と馬の血統青葉風

肝心のところ驟雨に聞きもらす

けふよりは計画節電籠枕

柿若葉むかし傘屋に渋の甕

蛍飛び闇に光跡残りけり

夜の枕低きを選びほととぎす

PDF= 俳誌の salon

八月号光耀抄

塩路　隆子選

麦秋の村ゆるやかに川曲がる　伊藤　憲子
麦秋やハーモニカめく一輛車　松岡　和子
四葩咲き夢二のをんな浮かびけり　竹内　悦子
衣を更へて素肌になじむ藍木綿　伊東　和子
駅ビルの書肆に立ち寄り夏の号　杉本　綾
母許へ滝の一景見逃さず　中川すみ子
掌にひと粒の幸さくらんぼ　森下　康子
鬼瓦焼く一徹の汗の貌　宮崎左智子
新緑のうづまく森や水の里　宮田　香
海へ鳴る風鈴の音や夕日影　山崎　里美
久々に母とふたりのレモン水　増田　一代
葭雀鳴かねば淋し湖の郷　小澤　菜美
声に出す養生訓や梅雨に入る　阪本　哲弘
墓石めく下界のビルや霾ぐもり　北尾　章郎
天主背に一揆の里の田を植うる　鈴木　照子
罅深き敦盛の笛青葉騒　坂上　香菜
杜若太古の沢へ祝詞かな　五十嵐　勉

PDF= 俳誌の salon

新緑に研磨体験若狭箸　山口キミコ
大湯屋を洗ひ流せる驟雨かな　笠井　清佑
泰然と金剛青嶺国境　坂根　宏子
若人のごとくありたし夏ショール　吉田　晴子
梅雨気配靴音湿る美術館　三川美代子
散る力残して赤き今朝の薔薇　塩路　五郎
王朝の絵巻さながら賀茂祭　西垣　順子
石仏の背丈に並ぶ矢車草　石川かおり
屋上のマーチ背後にビール酌む　宇治　重郎
嬰の得意の飛行機ポーズ梅雨晴間　松田　和子
獣園に虎の雄叫び南風吹く　藤見佳楠子
弁当の六割八分豆の飯　吉田　希望
五月来る舸子の小咄切りもなく　粟倉　昌子
むらさきの花恋ひ梅雨の花行脚　伊藤　純子
夫逝きて今年ひとりの更衣　大松　一枝
半夏生のいつもの窓辺猫老ゆる　岡　佳代子
錫杖のごとく南天花咲ける　紀川　和子
ケーブルに帰山の比丘尼薄衣　辻　知代子
牽制の声けたたまし抱卵期　中村ふく子
棟梁の差配せはしや走り梅雨　和田　郁子

PDF= 俳誌の salon

春蚊打ち子々孫々を減らしけり　中本　吉信
郭公鳴き木々に円舞の曲ひびく　小西　和子
収穫の玉葱軒に吊るす夫　飯田美千子
男性の料理教室黒鯛捌く　井口　淳子
風薫り勅使の白馬嘶ける　高谷　栄一
花柘榴訪ひし西安不夜城に　川崎　利子
梅雨晴間人ウオッチングする鴉　和田森早苗
妣眠る里の山河や風薫り　田中　浅子
ジキタリス古城風なる発電所　前川ユキ子
不忍池夏の柳とビルの影　能勢　栄子
大原に浄土の風や朴の花　片岡久美子
境内を埋める山吹七重八重　桂　敦子
軒先に木彫りの干支や青嵐　池田加寿子
引き算をしつつ整理や更衣　佐用　圭子
西瓜買ふ妻の目利きの当たりかな　山崎　真義
六月の自然のめぐみ子と頒かつ　吉波喜久恵
草笛はいまも苦手や父となり　松田　洋子
声高き時代男や梅雨酒場　山本　丈夫
山里の灯りちらほらさみだるる　山本　節子
岩赤きパワースポット汗しとど　山本　孝夫

PDF= 俳誌の salon

児の旅にビードロのごとゆすらかな　山田　愛子
雨霽れて緑あたらし東山　横田　矩子
葉隠れの実梅つぶらや天神社　福本すみ子
麦秋を走り去りたるのぞみ号　藤本　秀機
夏つばめ曲技よろしく宙返り　新実　貞子
蜘蛛が巣を張れる軒下雨催ひ　谷口　俊郎
昼顔のからむ垣根に夕日差す　竹内喜代子
ロボットが「いってらつしゃい」初夏の風　辻　香秀
青梅雨や嬰児ごろりん寝返りす　土井くみこ
梅雨に入るフォルテピアノを繰返し　笹井　康夫
道しるべに蜂が出ますと分かれ道　清水侑久子
畳紙に移り香ほのか更衣　小林　久子
チマチョゴリ着てアニハセヨ梅雨晴間　上甫木伊都子
ソウルにも黄砂降るてふ注意報　木戸　宏子
杜若を前に社殿の雅びかな　伊庭　玲子
みはるかす植田に星の瞬けり　大越　義雄
ずっしりと重き黒南風日暮れどき　大島みよし
人里に鳶鳴き梅雨の上りけり　大堀　賢二
濁り池蓮の浮葉に銀の粒　落合　晃

PDF= 俳誌の salon

琥珀集

ほととぎす

伊藤　憲子

老鶯や山門までの杉木立
麦秋の村ゆるやかに川曲がる
家ごとに神在す川端(かばた)風薫り
小流れに沢蟹の爪耀へる
励ましのひと声ひびくほととぎす
恙なき媼に胡麻のほうれん草
闇に光る針なき時計リラの冷

岩清水

松岡　和子

峡五軒新茶の味の異なれる
早苗田はジグソーパズル峡の景
呑むほどに臓腑透けをり岩清水
蓮鉢の目高争ふこと知らず
草むしり放課と致す遠チャイム
麦秋やハーモニカめく一輛車
花菖蒲峡にひとつの生水端(しょうずばた)

梅雨籠

竹内　悦子

父の日のパパを描けりピカソ並み
初物の鱧鮨囲み釣りばなし
守宮栖む新聞受けを塒とし
梅雨籠通販好きが靴を買ふ
梅雨籠リバイバルジャズ聞く夜かな
四葩咲き夢二のをんな浮かびけり
ががんぼも命あるなり逃がしやる

PDF= 俳誌の salon

藍木綿

伊東　和子

眼裏に祖父母在りし日柿の花
カーナビに青葉大和の道案内
バス停より学舎一町囀れり
衣を更へて素肌になじむ藍木綿
堂塔の空を自在につばくらめ
女梅雨つひひと言の悔深む
里山の陵線映し代田成る

夏の号

杉本　綾

丹精の芍薬ひと日癒さるる
駅ビルの書肆に立寄り夏の号
若葉窓の書道教室チャイム鳴り
春の野に谺をかへす槌の音
けさ咲きし鉄線の蕊白ふかき
炉の溶けしごとくに春の夕日かな
おそ桜いつしか独りだけの庭

なんじやもんじや

中川すみ子

母許へ滝の一景見逃さず
たまさかの自転車軽し風五月
まみえたるなんじやもんじやの花明り
静寂の水琴窟やつつじ咲き
検診は歯磨き点検花柘榴
義経の隠れ岩あり青岬　（海津大崎）
梅壇の花待つ岸へ入港す

グラジオラス

森下康子

掌にひと粒の幸さくらんぼ
四捨五入して卒寿の母や蝸牛
グラジオラス信号は赤ハートは青
五月雨や節電の街なほ暗き
尺蠖やイナバウワーをして測り
一献と鮎の塩焼き至福かな
父の日の墓に供へる「おいしい水」

PDF= 俳誌の salon

新生姜

宮崎左智子

子のゐない校舎が塒夏燕
月涼し吾が故郷を捨て難く
万緑に戯るるものの皆小さき
鬼瓦焼く一徹の汗の貌
咲きのぼる意志を貫きねぢり花
赤らめり酢に相性の新生姜
ふはふはと夏の蝶来て雨を呼ぶ

蝙蝠

宮田　香

赤き薔薇クレオパトラの野望かな
蝙蝠の翼ひらけばベルベット
新緑のうづまく森や水の里
北国の丘を埋めしのぼりふじ
新しきヒールを馴らす梅雨晴間
鯉跳ねて初夏の光を散らしけり
青嵐反戦ポスター煽りけり

風鈴

山崎里美

老鶯の激しき声に目覚めけり
野いちごの小さき束持つをさなの手
紫陽花に日々の色づき子を想ふ
若葉風木々に詫びつつ刈り込みす
この夏の被曝日本を立直す　（米詩人アーサー・ビナード）
梅雨晴間一歩半歩を前進し
海へ鳴る風鈴の音や夕日影

夏の星

増田一代

はつ夏のふるさとやいま無人駅
対岸は恩師住む街梅雨曇
合歓咲いて母校の子らの下校時
久々に母とふたりのレモン水
ブランドの玉ねぎ産地収穫期
ぢいちゃんの水車コットン青田径
悠然と泰山木の花白し

PDF= 俳誌の salon

鳴かねば淋し

小澤　菜美

河辺なる殉職碑なり男梅雨
大河に佇める鷺梅雨茫々
葭雀鳴かねば淋し湖の郷
禁断の笹百合シャッター音を浴び　（青山高原）
妙案のふと浮かびけり落し文
人の世を斯くも豊かに蓮咲ける
玻璃鉢に寒天の角涼しかり

命　名

阪本哲弘

夕暮れて波音を聞く燕の子
声に出す養生訓や梅雨に入る
深手負ふ筍混じる道の駅
老生の清新図り更衣
シーベルト計りて畳む五月鯉
妣を恋ひ花種を蒔く少女かな
命名は男の美学花菖蒲

芥子に非ず

北尾章郎

墓石めく下界のビルや霾ぐもり
老ひとり棚田の田植楽しめり
露天温泉に溺れかけをり目借時
郷愁や亡父の形見に更衣
新調の端切れを犬へ更衣
花菖蒲いま盛りなり休耕田
ひなげしは芥子に非ずと花圃の主

螢バス

鈴木　照子

宇治を行く源氏ロマンの螢バス
老鶯や宇治の茶亭の抹茶濃き
天守背に一揆の里の田を植うる
朝倉の秘伝蘭麝酒若葉冷　（一乗谷）
安宅の関に主従の像や松落葉
関節痛を気象士予報梅雨の冷
屋上より屋上俯瞰風薫り

PDF= 俳誌の salon

青葉騒　坂上　香菜

眺望の奥まで晴るる青山河　（有馬三句）
明易き山のホテルの水甘く
太閤の湯殿の跡や鴨足草
逆落しの義経径や木下闇　（須磨四句）
一の谷より望む浦曲や夏がすみ
源平の「戦の濱」や夏の潮
罅深き敦盛の笛青葉騒

田　植　五十嵐　勉

のどかなる音弾みゐる水車かな
風に身をまかせ農家の鯉幟
女院（にょういん）の花摘みし跡ほととぎす
落ちてなほ蕊生き生きと椿かな
杜若太古の沢へ祝詞かな　（太田神社）
ビルの間に男ひとりの田植かな
老木のみどり豊かや神寂びて

若狭路　山口キミコ

山藤の垂るる若狭に鯖の道
雨雲に向かふツアーや走り梅雨
若狭路の水田を漁るこぼれ鷺
眼鏡売る鯖江の街の夏日かな
若狭路や水田に隣る麦熟るる
新緑に研磨体験若狭箸
梅雨雲に見えつ隠れつ竹生島

驟雨　笠井　清佑

大湯屋を洗ひ流せる驟雨かな
形代を神官空へ放ちけり
みちのくへ青春切符夏休み
芝を刈る裸足に測る刈り加減
六月や加齢と言はれ脈乱れ
点滴の遅遅の落下やほととぎす
モニターに躍る心臓梅雨の雷

PDF= 俳誌の salon

床鏡

坂根　宏子

靄に色滲むつつじの緋毛氈
山の雨その滴々の若葉色
雨強し渓より湧ける墓の声
万緑の映ゆる古刹の床鏡
大枝にもりあおがえる泡卵
泰然と金剛青嶺国境
池の端超低音の蟇鳴けり

夏つばめ

吉田　晴子

白亜のかべピンクの薔薇は甘き香を
白つつじの大木鬼門あかるくし
マリア像白を尽くして若楓
コンサートのエール届けよ夏の陸奥
若人のごとくありたし夏ショール
水路閣水滔々と夏つばめ
若王子（しゃくおうじ）偉人の墓へ夏の礼

麦の秋

三川美代子

節電のゴーヤカーテン伸び早し
黄昏の比良山の稜線初夏の風
近江路やパッチ・ワークの麦の秋
さっと来て急ぎ飛び発つ軒つばめ
梅雨気配靴音湿る美術館
薔薇園に凛と咲きをりプリンセス
雨上がりの紫陽花が好き触れてみる

岩燕

塩路　五郎

涼餐に自動演奏ピアノ鳴る
大飯店室内扇に華語いきれ
青蛙跳び出す野菜道の駅
散る力残して赤き今朝の薔薇
板前の塩振る勢（きおい）夏料理
夕映えの峡谷翔ける岩燕
甚平や筋金入りの戦中派

PDF= 俳誌の salon

賀茂祭

西垣　順子

王朝の絵巻さながら賀茂祭
社頭の儀斎王代に青葉風
葵飾る馬上の勅使賀茂祭
絵筆では出せぬ色調牡丹燃ゆ
杜若にこぶ白鳥の番かな
藤垂るる集ふ母と子ふじ色に
一本の躑躅色分け競ひ咲き

枇杷たわわ

石川かおり

石仏の背丈に並ぶ矢車草
石段の隙間を出入り青蜥蜴
どくだみや釉薬残る登り窯
枇杷たわわ女ふたりの気侭旅
庭園の水あをあをと夏の鴨
かたばみや干物作りの網揺れる
犬小屋の跡にサルビア咲かせをり

梅雨の川

宇治　重郎

晴雨兼用傘が必要梅雨晴間
屋上のマーチ背後にビール酌む
止まるべき場所を探せり夏の蝶
奔流となり黙々と梅雨の川
山の端を離れまん丸夏の月
遠山はすっぽり隠れ黄沙降る
天を衝く起重機の下涼しかり

梅雨晴間

松田　和子

嬰の得意の飛行機ポーズ梅雨晴間
皮ごとの蚕豆口に嬰の機嫌
睡蓮のモネの絵親し初夏の風
モネの絵に勝る睡蓮比叡山
想ひ出をたどる坂道青楓
釣鐘の響きまぶしやサンバイザー
一隅を照らすみどりや延暦寺

PDF= 俳誌の salon

八月号月評

塩路　隆子

麦秋の村ゆるやかに川曲がる　　伊藤　憲子

滋賀県には麦を作っているところが多くこの時期になると「麦秋」「麦熟れる」の句がよく出てくる。広々と広がる麦秋の中を川が緩やかに曲がっている、作者はそれだけしか言っていない。しかし眺望のなかを悠然と流れる川を抱えた村、その村にきて緩やかなカーブをしているという大らかな風景が、読む人の眼裏にひろがる。おっとりとした作風と、思い切りのいい省略の効いた秀句として巻頭を飾ることにした。

麦秋やハーモニカめく一輌車　　松岡　和子

月評によく登場される甲賀に住まれる作者である。甲賀に残る、廃れつつある日本文化を掘り起こされる句が多く貴重な詠み手のお一人である。甲賀の情景を素直に詠まれている。特に中七の「ハーモニカめく」が何とも鄙びた麦秋の中をのんびりと行く一輌車をうまく表現されている。

麦秋を走り去りたるのぞみ号　　藤本　秀機

近江八幡にお住まいの作者である。前句の評をしているときに、対照的なもう一句があった筈と浮かんだのが掲句である。麦秋の中を瞬間と言っていい位の速さで走り去る「のぞみ号」を詠んでおられる。古来からの「麦作り」の残る近江平野を、瞬く間に走り抜けて姿を消す超速力の「のぞみ号」との新旧の取り合わせ、その是非、作者の心中を窺いたいものである。

母許へ滝の一景見逃さず　　中川すみ子

滋賀県がご出身の作者である。ふるさとを訪ねるときに車窓からであろう、必ず見過ごさず楽しみにしている滝の風景がある。春はおおどか、夏は洒々、秋は粧う中に、冬は厳粛など四季のかもし出す滝の風景を見逃さないと言う。もう故郷が近くなったという安堵感もあるだろう。省略が効果をあげている。

海へ鳴る風鈴の音や夕日影　　／山崎　里美

海水浴シーズンに設えた海の家であろう。夕方になると昼間の賑わいに比べると人影もまばら、海風に鳴る風鈴がわびしさを誘う。砂浜にくっきりと葭簀の影や風鈴の影が映っている。昼間の浜の騒がしさはどこへやら、静かな海が目前にひろがる。明日もまた賑わうであろう浜は静けさを取り戻している。いい光景を詠まれた。（以下略）

PDF= 俳誌の salon